

開催地名	千葉県浦安市
開催日時	令和5年10月14日(土) 10:00～11:30
開催場所	浦安市文化会館 小ホール
語り部	大谷 慶一 (福島県いわき市)
参加者	自主防災組織、浦安市民等 68名
開催経緯	<p>本市は、想定最大規模の高潮浸水想定でほとんどが浸水する想定となっており、避難計画の策定が課題となっている。また、自主防災組織の高齢化や自治会加入者の減少による担い手の不足が認識されているとともに、東日本大震災で甚大な被害が発生した液状化現象についても、時が経つに連れ風化してきている。</p> <p>このような状況下の中、自治会自主防災組織関係者などの市民を対象に、東日本大震災時の災害伝承の語り部の講演を開催することで、防災意識の認識を高め、避難行動要支援者への避難支援についての意識の向上を図ることとする。</p>
内容	<p>(1) はじめに</p> <p>震災の翌年から11年ほど、語り部として活動している。福島県の東日本大震災といえば、ほとんどの方が福島第一原子力発電所を思い浮かべると思うが、今回の話は地震の後に発生した津波被害で、死亡被害者が一番大きかった地域の話となる。私の住居はいわき市の薄磯地区という福島県の浜通りに位置し、福島第一原発から50km離れたところにある地域だ。原発の影響は無かったわけでは無いが非常に少なかった。一方、地震後に発生した津波での死亡事例が最も大きく、津波の第2波でこの町は一瞬にして壊滅状態となった。私はそこで、かろうじて生き残った。もともとこの町は漁師が少なくサラリーマン家庭が多かったため、日中はこの町には200名程度しかいなかったが、そのうち116名もの人が津波の犠牲になった。本日は、何でこんな小さな町で116名もの尊い命を犠牲にしなければならなかったのか、という話をしたい。</p> <p>(2) 東日本大震災発生当日の様子</p> <p>かつて通称「てんぐ様」と呼んでいた、石段を上ったところにある神社が自宅の目の前にあった。自宅から海岸までは200mほどの距離で、本日の話はその200mの間であった話となる。</p> <p>東日本大震災は、3分ほど揺れが続いた。大きな揺れが来たとき、家の外に出て作業をしていた。家が大きく揺れ、隣の家が全部落ち、ブロック塀が崩れた。揺れが収まった後、家の周りの地震の片づけをしようとしていた時、津波のことは全く頭に無かった。情報を得ようとテレビをつけたが、映らなかったので車のラジオをつけた。震災時にラジオは非常に有効だ。ラジオをつけると「3mを超える津波がくるから高台に避難するように」と連呼していた。小名浜港という大きな国際港(住んでいる地域から12kmほど南)への津波の到達時間は3時10分と言っていて、腕時計を見たらちょうどその時が3時10分だった(今も付けているその時の腕時計以外、家、車、船など財産は全て失</p>

った)。ラジオからの津波予想は、時間が経つごとに高さが3m、6m、10mと、だんだん高くなっていった。自宅から海は見えないため、津波が来る様子は全く無かった。「今までと同じく、来る来ると言ってどうせ来ないやつだ」と思っていた。その後、海へゆっくり歩いて向かった。海の手前には4.7mの防潮堤があり、近くまで行っても目線に海は見えない。道路を横切って防潮堤に上がって海を見た瞬間、家に向かって走っていた。その時、海の先に真っ黒い海の底が見えていた。波は通常砂浜に向かうが、あの時見た波は水平線に向かっていた。波の向こうに真っ黒い海の底があった。とんでもない光景があった。初めは夢だと思い、立ち止まって振り返って二度見したが夢じゃなく現実だった。夢中で自宅の方に逃げていた。

自宅に戻ったところ、飼い犬2匹を抱いた妻と、近所の77歳の女性と、92歳の体の不自由なおばあさんと一緒に、階段の手前で動けずにいた。「逃げろー」と大声を出して、階段を上がるように指示した。私は92歳のおばあさんを背負って階段を上がろうとしたが、おばあさんがずり落ちた。その時後ろを振り返ると、家が津波に飲み込まれ埃を巻き上げて崩れ落ちていた。その瞬間3人と2匹を置き去りにして、自分だけで石段を駆け上がっていた。妻は92歳のおばあさんの片手を引き、77歳の女性もまた92歳のもう片腕を引いていた。私は「手を放せー」と叫びながら石段を駆け上がり、生還することができた。その時の92歳のおばあさんの目は忘れられない。被災後の自宅の写真で分かるように、時計が3時27分で止まっている。津波の第2波が到達したのが3時27分だった。家でラジオを聞いていたのが3時10分、海岸にいて海の底を見たのが3時13分頃、そして津波の第2波が来たのが3時27分。海から自宅までたった200mの距離を戻するのに14分かかっているが、その14分間の記憶は全く無い。家が壊される大きな音や、まだ家に残っている人の阿鼻叫喚があったはずだが、音の記憶も全く無い。

私が石段を駆け上がった後、妻はおばあさんの手を放して階段を駆け上がることができて、犬2匹と一緒に無事、77歳の女性は一度津波に飲み込まれたが、十数分後に運よく助けることができた。おばあさんは残念ながらその3日後に、私にご遺体を発見した。様々な批判も受けたが、人間一人を助けるには大人3人の力が必要で、自分が助かるための判断は間違っていなかったと信じている。

しばらくは、おばあさんのあの時の目を片時も忘れられず、誰にも話せなかった。毎晩うなされるほど自分の中で抱えこんでいた。しかし、語り部として苦しい話をさらけ出すことと、時間が経ったことで大分解消された。

### (3) 震災を振り返って

私は津波が来ることを知っていたのに、海に見に行ってしまった。ほとんどの住民も知っていたのに逃げなかった。高を括っていた。まさかあんなに大きな津波が来るなんて、誰も思っていなかった。そんな全員の心の隙間に、災害が入り込んでしまった。原因は私たち一人ひとりの胸の中にあった。それなのに私たちは災害が起きるたびに、災害が大きければ大きいほど、その責任を自分以外に求めてしまう。また自分にだけは、災害が及ばないと考えてしまう。しかし災害は必ず自分の身近にある。自分の身は自分

で守るという考えの転換が必要だ。

ここで生き延びた自分にしか言えないため、あえて死んでしまった人のことを批判覚悟で言っているが、116名の死んでしまった人、それぞれ自分自身に原因があったと思っている。私たち自身がその事を自覚しないと、また次の災害で同じことが起きてしまう。

今日聞いたことを家に持ち帰って日常生活に戻ったその時、その場所で、頭の中で少しだけ考えて欲しい。日常生活、自分に命の危機が来たときにどうするかシミュレーションして欲しい。各自治体で作成されているハザードマップを確認することは大事だが、あくまで浸水する想定マップ（平均値）のため、はなから信じ込まないようにすることが必要だ。災害は想定通りには来ない。必ず想定外が出てくる。自分の命を守るためにどうすれば良いか、自分なりのハザードマップをつくることが大事である。



開催地より

自分の命は自分で守ることの大切さについて、改めて認識することができた。今後の防災活動に参考になる点があり、今後の自治会自主防災組織などの活動に役立てていきたいと思う。